平成24年3月7日

聴取結果書
東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会事務局
局員  仁保 智紀

平成24年2月23日、東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証のため、関係者から聴取した結果は、下記のとおりである。

記

第1 聴取者、聴取日時、聴取場所、聴取者等

1 被聴取者
民主党参議院議員 鈴木 寛（事故当時は文部科学副大臣）

2 聴取日時
平成24年2月23日午後0時30分から同日午後2時30分まで

3 聴取場所
鈴木議員事務所（参議院議員会館903号室）

4 聴取者
吉岡 斉 委員
高崎 智光 参事官
神藤 正樹 主査
仁保 智紀 主査

5 ICレコーダーによる録音の有無等
■ あり
□ なし

第2 聴取内容
モニタリング、SPEED Iについて

第3 時記事項
特になし。
【取扱い厳重注意】

〇鈴木前副大臣 より正確に当時起こっていたことを委員会としては理解し、そして、それを今後の提言に、あるいは、例えば、10年とか20年とか30年後に、私が国の後世の研究者や、あるいはその当時の為政者に知的アセットとして残していくというものだと理解しているのですけれども、その理解でいいですね。
〇質問者 その理解で、我々共通の理解だと思います。
〇鈴木前副大臣 そういうことであれば、私の知り得ることは、かつまた、私もやはりこのことは、公開の限界についてはいろいろな議論があると思いますが、少なくとも20年後ぐらいには全部言っていたいただいて、外交文書と同じでいいのかなという感じはいたしまして。
ただし、結局、公開期限によって、公開されればいろいろ御迷惑がかかる人もいるし、また波紋を呼ぶこともあるだろうということなので、お話できることがかなり、多分それとのトレードオフということですね。
〇質問者 わかりました。個別、個別のところでは、これはちょっと期限が緩らがっても、ずっと伏せてもらいたいということがございましたら。
〇鈴木前副大臣 年限がたっても、例えば30年たっても明らかにしないでくれということはありません。
〇質問者 ありませんか。
〇鈴木前副大臣 はい。
〇質問者 わかりました。
では、30年以内であっても、仮に何らかの、例えば国会事故調からの国政調査権の行使によって提出せざるを得なくなったような場合、そういう場合も絶対ないとは。
〇鈴木前副大臣 あり得るわけですね。
〇質問者 絶対ないとは言えない。多分なさらないとは思えるのですけども、独自の調査ですので。
〇鈴木前副大臣 そこで、私は、鳩村委員会のこれまでの運営については非常にリスペクトしています。それは、私も鳩村先生の御著作をずっと勉強して、吉岡先生のものも勉強してまいりましたし、やはり鳩村先生、吉岡先生初め、非常にアカデミックなアプローチといいますか、メソドロジーを非常に真実に守られて、今の私のような理解に向かってきちんと動いておられるということで全般的な信頼をしているのですけれども、他のところがそういうことになってくると、ちょっとそれがいろいろなリスクを感じますね。
特に、国会事故調が今、非常に不安定な状況にあって、その国会事故調が与えられている権能・権限について、国会側や事故調側とでまだ確認がなされていないという中で、少し心配ですね。だから、私も鳩村委員会には全面的に協力したいし、逆に言うと、30年というのは極端ですけれども、やはり次のジェネレーションには本当に残したいことがいっぱいあるのです。ですから、こういう立派な、かつ、しっかりしたところで私が残したいことを残していたけりというか、ある意味では大変うれしいことなのです。
【取扱い厳重注意】

だから、そういう意味で、もう一回と申し上げたのは、国会事故調が少し落ち着いたところで、何か更にというもの2段階論というのはあるのかなという気はいたしますが、そこはちょっと個別で御相談をいただければ。これは吉岡先生と参事官を御信頼申し上げて、そこは、要は、下村委員会の目的遂行に最善の判断とコミュニケーションをしていただきたいということを強くお願いしたいと思います。

○質問者 ありがとうございます。

今日、お話ししていただく中でも、ちょっとこのところはICレコーダーをとめてほしいとか、あるいは、音楽はいbyebyeも、ここは非常に個人の、他の方のプライバシーにかかわる部分なので取扱いには十分注意してほしいとか、そういう部分がもしございましたら、御指摘いただければ、メモの方にもきちんとアンダーラインを引くなどして我々も注意するようにしておりますので、その都度、是非御指摘いただければと思いますので、よくお願いいたします。

○鈴木前副大臣 わかりました。

○質問者 公開の関係でも、そこは強くですね。

○鈴木前副大臣 そうですね、そこは、だから丁寧にやっていただきたいということです。

○質問者 よろしくお願いいたします。

質問事項は、大きく分けますと2つ、モニタリングとSPEEDIの関係、それから校庭の関係、それぞれ担当者が若干違うものですから、順次担当の方から質問させていただくという形でやらせていただきたいと思います。よくお願いいたします。

○鈴木前副大臣 よろしくお願いします。

○質問者 それでは、冒頭、モニタリングとSPEEDIの関係についてお伺いさせていただければと思います。よろしくお願いいたします。

今回、初めてヒアリングをさせていただくということで、そもそも論的ところで、今回、文部科学省の副大臣でいらっしゃったということで、聞いたところでは、もともとは文部担当でいらっしゃって、今回。

○鈴木前副大臣 私の担当は教育とスポーツ。それで、笹木副大臣が科学技術と文化という所掌でした。

○質問者 わかりました。今回の事故対応において、鈴木先生は当時副大臣でいらっしゃって、さまざまな分野にも御関与されていると伺っておりますが、それこそ、その教育、スポーツ担当のお立場からかかわられたのか、どういったお立場で、どういった分野に御関与されたかというものを簡単にで結構ですのでお伺いできればと思います。

○鈴木前副大臣 発災当初の段階では、勿論私の所掌の教育は、3月13日以降、やるべきことがもう膨大にございましたから、それをこなしていくことは当然でありますが、政務三役は、仮の分担ではありませんけれど、大臣を補佐するということで申し上げると、原子力発電所事故の問題についてもいろいろと情報をいただき、そして、緊急時でありましたから、笹木副大臣の所掌を超えて、私が大臣やあるいは事務方に、所掌論上は疑義のあ
【取扱い厳重注意】

することは承知の上で、しかし、一人でも多くの被害を最小化するために、私が知り得る、できる限りの、個人としても、その職務にある者としても、あるいは大臣を補佐する立場としても、やることはやろうということで臨みました。

○質問者　わかりました。ありがとうございます。

それでも、モニタリングについてお伺いさせていただきたいのですけれども、伺ったところです。3月16日に政府の内部でモニタリングに関する役割分担が行われたと聞いております。これは官房長官の指示でなされたと保安院がIAEAに出した報告書にも書いております。その指示がなされた会合が3月16日の午前中に行われておると聞いております。そこに鈴木先生も御出席されたと聞いております。けれども、ここに御出席されて、そういう役割分担がされるに至った経緯を先生の御存じの範囲でお伺いできればと思います。

○鈴木前副大臣　それは16日ですね。

○質問者　はい。

○鈴木前副大臣　15、16日と、あの辺はほとんど寝ずなのであれば、官邸の地下に対応センターありますね。

○質問者　危機管理センターですね。

○鈴木前副大臣　危機管理センター、あの横にある分室で、枝野官房長官、それから保安院の事務方、それから原子力安全委員の女性の久住先生がいたことは記憶しています。アレンジに当たって、福山官房副長官がかかわっていたことは明確に記憶しているのですけれども、そのとき福山さんがいたかどうかは、少し記憶が定かではありません。本当に忙しかったので、いろいろ役割分担をしていましたが、少なくとも保安院と久住先生と枝野官房長官と私がいました。

それで、それは多分朝だったと思うのですけれども、その前は未明、だから16日の未明ということですか、それは16日の朝ですかね。ですから、15日の夜から未明にかけて、断続的になりまして、福山官房副長官とは電話で何度もお話をしており、やはり役割分担についての整理をきちんと方のいというごとに両者なって、それで、枝野さんのいる席で安全委員会と文部科学司と、それから保安院の3者の意見交換といいますかをセットしようということになったので、会議自体は副長官がセットしてくれたと思っております。

○質問者　わかりました。

このときの会議で、官房長官のほうから、モニタリングデータの収集と公表は文部科学省が行っていた、その評価は安全委員会で行うといった旨の指示がなされているようであるが、このアイデアというのは、もともと官房長官御自身が思いつかったものなのか。

○鈴木前副大臣　そこは、決めていただいたのは官房長官ですが、一般論としては、情報収集と戦略編集はやはり分かれた方がいいという趣旨のことは、私からずっと申し上げてまいりました。そもそもですね、そういうことです。

それから、結局、20キロの外は、モニタリングのデータ収集は文部科学省が徹底的にま
【取扱い厳重注意】

ずやりますと。それも、そもそも、御案内のように、モニタリング運営マニュアルでは、
平時においてはというか、要するに、あらかじめ決められていたものに従えば、文部科学
省の任務ではないのです。これは福島県の任務ですね。
〇質問者 そうですね。
〇鈴木副大臣 したがって、そのルールに従えば、文部科学省はモニタリングすらしな
くていいということになっています。しかし、そこは私が、これは政務三役会議と政務
三役の情報交換とちょっと分けていただきたいのですけれども、もう断然的に大臣室に政
務三役が集まっていたので、マニュアルはあるけれども、緊急事態であると、
20キロ以内、これは発電所のいろいろなことがあるし、そこは保安院と東京電力がおやり
になるということですから、勿論サイトセンターへの協力とか、そういうことは当然、
既にマニュアルに決められたとおりやっていますけれども、やはりそこは、国民の皆さん
の安全を守る観点から、マニュアルを超えるけれども、これはやるべきであるということを
私が主張しました。

それでも、それは大臣もいらっしゃって、そうではないかという御承認もいただいて、そ
して、私たち政務三役の方から事務方にお願いをして、是非ここは、国民の健康と安全を
守る観点からマニュアルを超えるけれどもやってほしいということを政務から事務方にお
願いをし、そして講論をしてもらいました。

そこで、従来の所持は幾つか超えていますことは、勿論自覚していました。それと、文
部科学省の持っているあらゆるリソース、JAEAとか文部科学省の事務所は当然ですけれど
も、その他の必ずしも原子力関係とは関係のない独立行政法人の協力を仰ぐと。例えば、
JAMSTECというところがありますけれども、これは海洋の研究でありますから原子力安全
とは全く関係ないわけです。しかし、これは前後しますけれども、例えば海洋のモニタリ
ング等々が必要だと海上保安庁に要請をしたところ、もうそれだけの余力がないのでとい
う御返事でありましたから、であれば、JAMSTEC、要するに文部科学省のコミュニティー
の中で船はないのかということを私が申し上げて、JAMSTECに白鳥丸というものがありま
すと。では、それを出航してほしいということをお願いしたり、例えばJAXA、これは宇宙
ですから、全く原子力安全とは関係ないわけですけれども、例えば航空モニタリングに出
ていたときが。

これは明らかに法律の、平時であれれば会計検査院から指摘されますね。要するに、その
施設の目的外使用ですから。JAXAの飛行機とかJAMSTECの船は、モニタリングするという
ことは設置法の外ですから、そういうことは私は十分承知で、しかし、緊急事態で、そこ
は政治主導で発動してほしい、そのリスクは我々がとるのでということを申し上げたのは
しておりました。

それでも、とにかく我々やられることがやろうということで、モニタリングについては断固
やるということは、我々の発災直後からの基本的な方針として貫いていました。
一方で、この評価あるいはシミュレーション、その席で、私はシミュレーションという
【取扱い厳重注意】

ことは明確に申し上げたと思います。評価にシミュレーション。実測とシミュレーション、要すると想定値というか予測値と、これは吉岡先生も十分におわかりだと思いますけれども、リアルに測定された値の中に我々は専念したいと。評価が入りますと、またそこには客観性とさまざまなが働かということを、私も一応アカデミックリラクゼーとしてそれなりに持ちていたので、我々は、全くそういう予断なく測ることに徹することに徹することであり、そのことが国民の理解を得られるだろうということで、そういう役割分担をしたということとありました。

それから、評価というのは、結局、アズ・メニュー・アズ・ボッチャルというか、要するに、より多くの情報源とデータを総合して、評価なりシミュレーションなり、あるいはいわゆるシナリオというものがあるが、それから我々が20キロ以内の情報については、全く報道ベース知ることができませんでした。

要するに、オートマティカリーに流れてくるものは見え得ることがありましたけれども、いわゆる保安院とか原子力安全委員会が持っている情報を全部流してきているのか、一部なのかということはわからない。当然ですけれども、それは一部なわけですね。それはそれでいいと思います。というか、役割としてはそれでいいので、要するに、我々はごく一部しか知り得ない。しかも、それはデータだけであって、いろいろなエビソディカルな話とか、あるいはその担当者の見通しかとかということについては我々は全く知り得ない立場にいますから、ともかく我々の持っている情報というのは非常に偏りがある、20キロの外の話であると。

それで、結局評価というのは、基本的に20キロメートル圏以内の、特に発電所そのもの及びその周辺のデータというものが非常に核心的に重要であるから、それを我々は知り得ないということで、それを全部知り得るのは原子力安全委員会であると。かつまた、その機能もあると。保安院のみならず、文部科学省のみならず、ありとあらゆる役所、あるいは東京電力含めて、原子力安全委員会及び内閣官房は、原子力対策本部は、情報収集のあらゆる機能を持っているわけですから、したがって、その指揮下に情報の収集及びそれの分析、解析、シミュレーション、それを全体として評価という言い方を枝野さんはされましたがけれども、すべきであるということを申し上げました。

加えて、それから評価とそれに基づくいろいろなアクションを原子力安全委員会が本部に対してアドバイスするわけですね。それで、要するに対応の策定は原子力本部がということがありますが、このとき、同時に起こっていたこととして、私もごく一部知り得ていましたけれども、つまり、あのときの内閣官房あるいは政府がやるべきことは、次なる新たな死者あるいは重篤な後遺症を最小化するというのが、政府がやるべきミッションであると。あのとき起こっていたことは、浜通りの医療供給体制の崩壊。例えば医薬品の供給、それに従来救急搬送体制の崩壊、それによって脳卒中患者、心不全患者あるいは妊婦の救急搬送受け入れ不能ということが大変に問題になっていたです。

そのことは、私も相馬市長などからも直接聞いていましたし、私の医療関係のネット
【取扱い厳重注意】

ワークから時々倉庫へ入ってきてしまいましたし、私も、その搬送や、あるいは透析患者の域外への搬出という問題、私もいわき市のそうした人たちを鶴川市に送ることの直接の操作レーショーンとか、あるいはてんかんを持っている子どもたちの、例えば千葉県への受け入れとか、そうした死亡しない重篤な障害、こういう問題も同時に起こっていました。

私はそういうことの一部を知っていただけでも、その全貌を把握し得るのは、これは原子力本部であり、かつ、原発本部もそれは知らないわけですね。もっと言うと、内閣がそうした医療の状況というものについて知っていると。

あのときに起こっていることは、要は、ガソリンのタンクロリーが入らない、そして、では、自衛隊等々による代替輸送手段が確保されるかということ、それもされないということと、まさに油の問題というもののが同時並行で起こっていました。それからもう一つは、計画停電ということが起こっていて、東京都内もパニックに陥っていたと。3月11日の戸建難民対応とかを私もやっていました。例えば、主要駅での混乱の状況とか膨大な交通渋滞ということが同時多発で起こっているので、その全貌を把握し得る原発本部、更には内閣が、総合的に対応及び公表については一元化すべきというのが、危機管理の基準であるという観点を私は申し上げたと思います。

○質問者　わかりました。

ちょっと時系列的に整理をさせていただきたいのですが、3月16日の会議に至る以前に、文部科学省内の政務の情報の交換の場において、文部科学省は、所掌の範囲外ではあるものの、モニタリングに積極的に対応していくべきであると。

○鈴木前副大臣　20キロの外についても。

○質問者　外について、そのときに、まだ評価云々という話は出ていないということでよろしいですか。

○鈴木前副大臣　評価雲々。

○質問者　その評価は安全委員会がやるべきであるとか。

○質問者　16日に整理したような話は、当初はまだ出ていないということですね。

○鈴木前副大臣　いや、とんかくモニタリングをしっかりやりましょうという話ですね。

それで、そもそも転移法、あるいは避難命令は原子力災害本部が出すことになっていますから、我々が単独に出すということは、権限上あり得ないわけですね。何らかの命令を下すということは。

命令を下す前提として評価があるわけです。それは、設置法を何度も読みても、原子力安全委員会が評価をして、助言をして、最終決定は本部長がやる、こういうことになっていますから、当然、文部科学大臣は一原発で、副大臣は経済産業大臣であるということは、要するに法律の設定であります。

○質問者　原発法ですね。

○鈴木前副大臣　ええ、原発法の設定なので、その理解によっていたということですかね。

○質問者　今の質問の趣旨は、最初はモニタリングをとにかくやらないといけないねとい
【取扱い厳重注意】

う、むしろやることが大事だという状況で、多分これは、11日に事故が発生しましたが、それから12、13日ぐらいまでの会話は、まず何かとかモニタリングをやりましょうという話、その段階でお話だと思うんですけれども、そのときに、文部科学省の中で、政務三役の皆さんも集まったときの話の中で、評価の話までというのは出ていたのでしょうか。この16日に。

○鈴木前副大臣 それでは、数字を見れば、大変だねとか、そういう意見交換というか感じ取ったことは言いますね。それでも、文部科学省は対外的に評価をやるというかミッションを負っていないので、だから、フォーマルに何かの評価をするというのは我々のミッションではないと。

○質問者 そういう話もされていたのですか。

○鈴木前副大臣 そういうのは、もう完全に常識としてというか、理解として私は理解していませんから。

○質問者 ほかの大臣とか税木大臣とかの間で、皆さんもそういうお話をされて。

○鈴木前副大臣 それは、これは元に名詞のことになってしまいましたけれども、政務三役の中で、私の経験は御存じのところですから、やはり法律についてての解釈力は、それなりに私を圧倒的にすすぐってましたと思います。それから、いろいろな情報分析とか情報収集についての政策形成過程とかについては、これも私が、私は政策形成過程論の研究者ですから、そういうことにについても、それは私が明らかに優越しているということについては、これは、恐らく三役のみならず文部科学省全体の共通理解だと思いますから、そのことは別にそのとき確認しなくても、もうそれはそういうものだということです。

技術系の職員は、そこが少し劣っているところがあるのですね、法律の理解とか、解釈とか、政策決定とか、あるいはミスティングの使い方について。それから、震災以後もそうですけれども、震災前も時々直しながら、それから、もうと起こってきたこととして、これは、私も役人をやっていましたけれども、残念ながら、文部科学省はそれまでも、官房総務課が審査してきただ文書を副大臣である私が当直を入っているということが恒常化していました。

私からすると、少なくとも霞が関で10年間事業担当として仕事をしてきた者からすると、やや稚拙なミスティングとか、答弁書とか、あるいは見解書ということが、割と科学技術担当の人たちの作業のスクリーニングでは十分に直し切れずにいるということは、2年間、割と頻発していて、それを私がきちんと法律に基づいて、あるいはルールに基づいて、マニュアルに基づいて、そのミスティングはどう使っているのか、あるいはそれは何によって言っているのかということを確認するということはしっかりでし

だから、どこで何を言ったかというのは、私もそんなに記憶力がいいわけではないので全部覚えていませんけれども、どういうフリーディスカッションをしていきけれども、最後のディスカッションというのは、要するに文部科学省の意思決定として何をするのかという
【取扱い厳重注意】

ところは、私は常に、勿論私も完璧ではありません、あれだけの状態ですから、完璧ではないと思いますけれども、何か、評価について、それは、今度は評価のディフィュージョン。定義の問題と思いますけれども、何か、政策が、あるいは大臣ないしは副大臣が公的に評価することをしなければいけないという認識は、というか、評価しないという雲災法についての理解を私は明確に持っていました。
○質問者　具体的な話ですけれども、3月15日の夜ごろに浪江町の周辺で330マイクロシーベルトという比較的高い線量が出ておりまして、これは文部科学省の事務方の方に聞いた話で、そういうデータを公表するに当たって、ただ単に330ですと出すのではなくて、この数値が意味するところは何ということもつけないと、逆に誤解を招くということ、そういうこともあり得るのではないかというような話を副大臣ともされたとかというような話もあるのですか、そういった御記憶というのはございますか。
○鈴木前副大臣　いや、記憶は定かではありません。そのことについてはありません。ありませんが、そこはちょっと思い出せないですね。お話をしている中で思い出せるかもしれませんが、ちょっと直には思い出せません。
○質問者　わかりました。
○質問者　この330マイクロシーベルトは。
○鈴木前副大臣　ただ、私がずっと申し上げてきたのは、あの表を出せた言うまいでした。必ず出すときには、要するにワンショット何ミリシーベルトで、例えばレントゲンであるとか、いわゆるパーイヤーでこうであるという、あの表がありますね。
○質問者　はい。
○鈴木前副大臣　あれも、もともと科学技術白書とか何かそういう文書にしていたのだけれども、それがワンショットで何万のものと、パーイヤーのものがごちゃごちゃになっていたのです。
○質問者　そうでしたね。
○鈴木前副大臣　これを、右側はワンショットにして、左側は要するに積分にして、そういうふうなことをして、必ず何かを出すときはこのものをつけないと。浪江の話では言ったかどうかは定かではありませんけれども、要するに、幾ら幾らと言われても、それが何に当たるのかということの理解ができないので、その理解を促進するために、ここは割と技術系の人々の悪いくせで、自分は何か当たり前なんだけれども、知りませんね。だから、私は以前にあの表があるのを知っていたので、それがその前日だったか前々日だったか覚えていませんけれども、とにかく数字単独で出すなど。
あの表については、私のところに持ってこさせて、これをこう分けて、こうやって、こうやって、もうってと、あれも最初は何か単位がずれていたりして、要するに、こちらはミリマイクロで出していて、あちらの表がミリ何かで、これも誤解を招くと。だから、以後、マイクロで出すのだったら、こちらも全部マイクロにしろと。単位変換とかそういうことが、前日に指導したかどうかはわかりませんよ、だけれども、少なくとも発災後、割と初期の
【取扱い厳重注意】

段階でそれを口酸っぱく言ったことは、しかも数回言ったことは、しかもあの絵ですね、あの絵と言っても、わかりますか、あの絵って。
○質問者 よく見る。
○質問者 飛行機で何回したらどうだとか。
○鈴木前副大臣 そうそうそう、飛行機で何回とか、あの絵です。あの絵をかなり最初、3回か4回バージョンアップしました。それで、とにかく理解を促進するためのそういったことをきちんと併せて出さないという指導はしました。だから、そのときも同じことを言ったのかもしれません。
○質問者 わかりました。
○質問者 先ほどちょっと仁保のほうから質問させていただいた、その荒江江の330マイクロシーバルト、パー・アワーという数字は、このころの流れの中では結構大きな出来事といいますか、すごく大きな線量で、我々も1Pに行って1時間以上いましたけれども、こんなに浴びていないというか、そのぐらいの数字で、文部科学省の中では、事務サイドは結構これは大変だという意識でいらっしゃったようで、三役の方にも御報告したのですということまで聞いております。
それで、それまでの流れの中では、ちょっと大きな数字が出たよ、大変だなと、ただ、事務方の方が困られていたのは、330マイクロシーバルトというのは一体どういう数字なのだからといって広報したらいいだろうかというが、先ほどちょっと質問がありましたが、必ず聞かれるだろうから、聞かれたらどうやって答えるのだろうかということに当然ぶつかりられて、それで、どうしようかと議論していたのですよという話をされていました。
恐らく、鈴木先生もその場にいらっしゃって、そんな話の流れの中で何か記憶に。
○鈴木前副大臣 実は、副大臣室には【〇〇〇〇〇〇】は、常勤とは言いませんけれども、来られるときはずっと来ていただいてくださいということをお願いしていました。それから、【〇〇〇〇〇〇】、この【〇〇〇〇〇〇】さんと【〇〇〇〇〇〇】さんがいたということは、どうなんだろ、本人に確認しないといけないの、いいてもらったかどうかということはあれですねけれども、事実として申し上げると、ですから、そこはちょっと取扱注意ですがね。
○質問者 はい、わかりました。
○鈴木前副大臣 経済産業省は、どうしても工学部系の御縁が深いということを私は理解していきましたので、とにかく文部科学省、要するにファクトというか、ニュートラルなリアリティーというものをやはりきちんと純粋にあらわするのが文部科学省の仕事という自意識があったということと、それから、我々は、要するに発生源がどうあれ、とにかく人体の環境、要するに内部被曝と外部被曝のところをどうプロテクションするかということが、一義的には重要。
先ほど申し上げた、20キロメートル圏外で死亡ということは想定していませんでしたけれども、少なくとも重篤な健康被害ということを最小化するというのが私たちのミッションだと思いますから、医学部の【〇〇〇〇〇〇〇】先生にも副大臣室にずっと常駐していただいており
【取扱い厳重注意】

ました。

そして、私自身は、幸いに医学関係者は、精神科も小児科も産婦人科も外科も内科も、いろいろな知人がそれまでにずっとありましたから、しかも、それも東京大学だけだと偏りますから、いろいろな大学の医学系の方々とは常に、勿論医薬にもよりますけれども、数十人とコンタクトしたり、あるいはメールをもらう環様にしていたのです。なので、医療状況というのはかなり独自のルートで入ってきたということ。

それで、★★先生がいらっしゃって、★★先生をサポートする形で理学系の学者からいろいろなことが★★先生のところに入ってくるわけで、そのあたりからのいろいろなブリーフィングというか意見をしていたので、勿論、渋谷町の数字が出たときもそうですが、相当な危機感はもともと持っていました。

それから、いろいろなシナリオも★★さんたちは言っていたから、そのことは頭に置いてながら、それと一方で、やはり、とにかくどうあれ人間がいるところの周りの外部被曝と内部被曝はどうするのか、したがって、とにかく実測をさせしなければいけないのかというと、人間がいるところの現状を、まずは空間線量ですねけれども、要するに内部被曝、外部被曝、いかにって部分の実測をきちんとするということが僕らにとっては一番大事なんだということがあって、そういう思いを持っていましたね。16日には既を持っていました。

それで、そういう中で、これも申し上げていいのかどうかわかりませんが、内閣官房参画をやられた日本総研にもいた、今、多摩大学にいても書いておられる田坂広志さんから、私は15日の末明に電話をもらいました。田坂さんからも、しっかりやらないといけないですねというお話で。

〇質問者 15日の末明、16日の末明。
〇鈴木前副大臣 16日の、だから15日の夜中の深夜から末明のどっちか、深夜かな。みたいなものもあって、私は、別に田坂さんの話は既に頭の中のイメージにあったので、それで、福山さんは是非、直接話をしてくださいということでつないだりして、福山さんは、そこを理解してもらって、そういうこともあって、かつ、やはりこれはもう一回しっかり体制を整えないとということがあって、福山さんに、官房長官にそのことをやった方がいい、3者間の整理を、4者ですか、原災本部と安全委員会と保安院と文部科学省との役割分担、整理をきちんと扱う方がいいようにということを進言して、この16日に及んだということはありますと思います。

〇質問者 その福山副総長官に進言をされたときには、既に文部科学省の役割、安全委員会の役割と、具体的にアサインされた形で御提案されたのか、それとも、一般的にこの4者、役割分担をする整理すべきではないという形での進言をされたかというのです。
〇鈴木前副大臣 つまり、それは一般に覚えていませんけれども、やはり、略称的な言い方で、すけれども、文部科学省は言葉が下の仕事に徹しろということはずっと言っています。それは、福山さんにも、それは長らく会話していますから、だけれども、こういうときと
【取扱い厳重注意】

いうのは、とくに聞く情報源は情報源に従って、戦略立案を戦略立案に従ってやらなければならないのだと。戦略立案は全般を知り得る立場で、むしろ、それに分析とか判断に全力を傾注して、情報源は、どこかか、あるゆる種類の情報源をさまざまな情報源からとることに従いないといけないのだろうということはあらゆる人に申し上げましたから、福山さんにも申し上げたと思います。

それと、今回原子力と津波と三、地震と特に津波とこれとので、今、二次被害が、私は大学病院のJMATが入って、JMATは、実は意味がないと言ったら失礼ですけども、もう既に亡くなられていたので、むしろ慢性病の悪化ということがアーリーステージの最大の問題だということは、大学病院の方からきちんと医学教育課高等教育局の方からリアルタイムで入っていましたから、そういうこともあると、そうすると、この両方の課題をきちんと集約して、それは官邸で判断しないといけないですね。それで、福山さんもそのとおりだということだったと思います。

〇質問者　わかりました。

それで、済みません、前後失礼して恐縮ですが、16日の朝に会合がありました、この会合の中で、例えば安全委員会から、うちはそういう評価する能力がなければやめてほしいとか、そういう何かやりとりがあったとか。

〇鈴木副大臣　それは一切ありませんでしたし、久住さんはそれは当然だと。私も持っている情報はそのとき持っていたしまして、これはきちんとやらないといけないですね。

〇質問者　その議論のイメージとしては、官房長官が全体を仕切られて。

〇鈴木副大臣　だから、私がこう言う。こう思うよ、こうなっていて、こうなっていて、これもこういう判断と、先ほど申し上げた、要するに、やはり全般を把握するということと、全般に基づいた、それから、いろいろなシミュレーションなりいろいろな評価を公表する上で、結局、あるシナリオというものを持った上で、証拠、それは一つに決められないのだろうけれども、それにに基づいてきちんと戦略的に、要するに統合的に、戦略的に判断できるのは官房しかないの。それは、原子力安全委員会が所掌上もあるシステム上もそうなっているねということで、それはそうだ。だれが読んだって、そう書いてあるわけだから。原子力安全委員会の久住先生も、しっかりとやらなければいけないですねと言って、別にそれに対して、そこが何か議論になったということではありません。ほぼ確認です。それに保安院からも何の異論も唱えられなかったし、それでいいですね。それぞれ、関係の確認をして、何度か確認をして、では、後に文章にしましょうねということで。

〇質問者　最終的に官房長官が決定。

〇鈴木副大臣　それをもう一回確認してもらいました。

〇質問者　オーソライズされた。

〇鈴木副大臣　オーソライズされた。それを後で、ここだと言えるに紙に残らないから、そこにいた事務方に、今言った話をきちんと紙で各省庁へ流せと。それで、その午後から何かに紙が来たと思います。
【取扱い厳重注意】

○賛問者 こういうもの。
○鈴木前副大臣 そうそう、多分それだったと思う。
○賛問者 ちょっと手書きで。
○鈴木前副大臣 こんな感じのものです。
○賛問者 わかりました。
○鈴木前副大臣 「モニタリング体制を強化し」、そうですね。それで、集約してやると。
○賛問者 結構その時刻が、これが10時40分官房長官発言要領となって、この時間帯には
これはでき上がっていった。これは送った時刻もあったわけ、10時四十何分だった。
○賛問者 10時24分。
○賛問者 そういう時間帯にはもうでき上がっていったり。
○鈴木前副大臣 でき上がっていました。かなり早かったと思いますよ。
○賛問者 そうですか。この会議自体が早かったのですか。
○鈴木前副大臣 朝7時とか8時とか、何かそういう、何かあの日、いわゆるセンターの
会議が9時とか8時とかに始まるのですよ。
○賛問者 通常9時でした。
○鈴木前副大臣 9時。それで、それの前しかとれないと。でも、これは絶対にとってく
れと。もう要するに16日のオペレーション開始する前に絶対やっておかないと、もうそれ
は本当に一刻を争うから。だから、その前にやってくれということで、だから、枝野さん
の動線に合わせて、センターの横の会議室でやったというのはそういうことです。
○賛問者 わかりました。このとき、文部科学省からは鈴木先生以外に何か事務方が。
○鈴木前副大臣 それは覚えていない。
○賛問者 わかりました。
○鈴木前副大臣 とにかく人がいなかっから、みんなで手分けしてやっているから。別に僕
にはおつきをつけなくても大丈夫だと思うなと思っていなかったから。多分そんな、逆に無
駄なことはするなと言っていたので。でも、だれかいたかな、リエゾンの方で1人入って
いたかもしれない。
○賛問者 この紙は、だれが具体的にワープロ打ち作業をされたのかというものは。
○鈴木前副大臣 わからない。リエゾンの人かな。うちから行っているリエゾンか、
ちょっとそれはわからない。それは覚えていない。申し訳ないけれども。
○賛問者 すみません。ちょっと話がすごく戻ってしまって恐縮なんですが、そもそも文
部科学省が所轄を超えてでもモニタリングをやらないといけないという問題意識を持たれ
たきっかけとか、そういうものというのはございましたか。
○鈴木前副大臣 それは、政治家として、このような緊急時に当たって、国民の皆さんの
命と健康を守るのが我々の仕事だと思っています。それから、私も神戸出身ですからど
も、私は阪神・淡路大震災のことも知っていました。
【取扱い厳重注意】

やはり、当然役人だけに任せると、決められたことをマニュアルどおりやるなど。マニュアルを見たら、文部科学省がやらないということになっていたから。だからこそ、やはりそれは、我々が持っているリソース、要するにベストエフォートでやると、ベストエフォートというのは僕の口ぐせで、とにかく最善を尽くすと。

私はインターネットのカバナスが研究なので、ギャランティー主義の不作為の問題と、要するに保証をして、義務化して、それが完全履行できないときには、結局引ってしまうということです。私は、近代国民国家システムの問題というものをずっとやってきたので、そうすると、ギャランティー主義でやると、役割をした人はギャランシーを果たせないと思うと引いてしまうことがある。それが結局、エアポケットというか、ポテンヒットになって、その連鎖が始まると。

一方で、インターネットのカバナスというのは、みんなが保証はしないけれども、あるいは責任は持ってないけれども、最善を尽くし合うことでいいガバナンスができるということを研究していたので、そのことを2年間、とにかく私の在任期間中は言ってきました。1年半ぐらいいたたましかったから、この政府はベストエフォートでやるんだということは、文部科学省の皆さん文化として確立しだったので、それは公務員の使命だということでしたし、当時の文部科学省の幹部、事務次官、あるいは森口文部科学審議官、それはもうわかりましたということで、そこに異論は特に役所の方からはなかったと思います。

○質問者 全然別の話になっているかもしれないですが、何人かの方から聞いた話で、当時の細野補佐官が、モニタリングの現状について非常に強い問題意識を持たれていて、3月13日ぐらいから文部科学省の幹部に対して、「モニタリングどうなっているのだ」とか、「国が責任持ってやるべきではないか」とか、そういう働きかけをされていたようなのですが、そういったお話というのは聞かれたと。

○鈴木前副大臣 細野さんはちょっとありましたよ。13日からどうかはわからないけれども、13日ですか、もうちょっと後ではないですか。

○質問者 かなり早い段階だというふうに、少なくとも15日以前ですね。

○鈴木前副大臣 ああ、そうですか。だれもも、細野さんが動き始めたのは、要するに総理補佐官何とかチームが立ち上がっているからです。だから、何か細野さんに言われて新しくやったという話は何もありません。勿論わかっていると、わかっていて、今、例えば、それこそ車がないか全部の大学に聞けとかですね。だから、あとは計測器も、これは文部科学コミュニティ全部で集めてということを言いましたから、要するに車と人と機器がないわけですね。これを集めろという指示はもう既に飛ばしていましたから、別に同じことの確認がなされただけ。

○質問者 わかりました。

○鈴木前副大臣 それで、とにかく、うちは測ることは一生懸命やるからという、細野さんとは多分、僕が一番やりとりしたと思うので、だれが考えてもというか、心ある政治家や心ある学者であれば、だれが考えても同じこと。
【取扱い厳重注意】

○質問者 では、細野野村官とモニタリングの重要性についてのやりとりがありましたか。
○鈴木前副大臣 もう常に連携しながらやっていたと思います。
○質問者 そう一点だけ、細かい話なんですねけれども、３月１日の中には、官房長官の秘書官が各省の課長級を集めて、各省といいますのは、文部科学省、警察庁、防衛省、保安庁を集めて、まさにここに出てくる組織を集めて、モニタリングの役割がどうなっているのか、ということを聞くような会合を持ったという話があるのですが、そういったことがあった御記憶とかは。
○鈴木前副大臣 それは一応覚えていますけれども、それはあったのでしょうか。
○質問者 先ほどの話の流れと、15日に鈴木先生が福山さんに会わせて、福山さんとの間で、モニタリングの役割分担をきちんとしなければいけないという話をされたと、ここから先は勿論想像でしかないんですけれども、その話を聞いた福山さんが、官邸において秘書官たちと話をしたという流れなのかと聞いていて思ったのですけれども。
○鈴木前副大臣 そうかもしれませんが、とにかく大事なことは何度でも何度でも、いろいろなルートで確認するということは大事だと思ってしましたし、正直申し上げると、やはり僕も自ら、20キロメートル圏内の話はどうしているのかというのは、知りたかったり、わかなかったり、そこで振り返れば、本人たちもわからないかったのだが、これがわたったのだけれど、そういったことでした。
20キロの外の話は、僕らはわかっていません。警察官を何をしてくるのか、それから、防衛省が何をしてくるのか。それから、逆に言うと、海上保安庁は難しいとか、それから、防衛省、もうちょっと例えば空なんかをやってくれという要請をしたわけではないけれど、結局飛行機が飛ばないということなので、やむを得ないからJAXAから飛行機を出させという指示になったので。
かつ、だから一方で、そこはこういうことを思いました。つまり、防衛省と警察庁とかに対しては、それまではあくまで要請ベースなわけですね。そのときに、官房長官の指示にしかるべき、文部科学省、官房長官の決めることに従って防衛省と警察庁にお願いができますから、それは、組織論上はその方がより望ましいわけで、そこも、20キロの外でのモニタリングはうちがきちんと責任を持っておりますから、そのかわり、そこをきちんと仕切ってくださいということを申し上げました。
そうでないと、要は、別にこれは責めているわけではなくて、海上保安庁とかができないと言ってくるわけですね、あるいは防衛省も、これだけしか出せないと、それは当然だと思います。要するに避難とか復旧の方が重要だから。だから、みんな命を守るために頑張っているわけだから、先ほどの新たな死者を減らすことと重篤な後遺症を減らすこと、このことでみんな共有しているので、そのプライオリティからすると、防衛省もうばんぱんなのでね。
ただ、そのときに、特に防衛省とか警察庁というのは、これは役所のくせというのであって、権限がどこにあるかということを物すごく気にするわけですね。防衛省とか警察
【取扱い厳重注意】

庁というのは特に、そういう意味で、どの法律を見ても、文部科学省が防衛省とかなんとかに要請するという権限はなわけですね。そこに官房命令というか、官房指示というものを取りつけておくのが、要するにそういう割と権限を大事にするというか、そういうところでお勤めを勤かす上では非常に重要だと思ったので、そのことわざ、むしろ文部科学省にモニタリングについての統括、同僚の首長ですけれども、同僚の首長としての統括権限を指示として確認をしてほしいということは言いました。それ以降は、物すごくくじぴちと協力してくれた。

○質問者 そういう事前の調整みたいなものを、例えば警察、防衛とされたりとか、安全委員会とされたりとか、そういうことば。

○鈴木前副大臣 だから、事実上の措置として、だれがどうできるのだということのモニタリング体制については、逐次私に報告をして、逐次どうかわからないけれども、少なくとも11階の幹部、11階の幹部というのを、要するに官房総務課長以上、と少なくて私、鈴木との間での情報共有は、要するに、少なくとも次官が知っていて僕が知らないことはなかったと思います。次官が知っていて鈴木副大臣が知らなかったことはいっぱいあったと思いますけれども、事務次官と僕のレベルは。ただ、3階と11階の情報共有はどうだったかということについては、それはわかりません。それから、勿論全部が全部上がっていくわけではない。3階というのはEOCね。

○質問者 はい。

○鈴木前副大臣 だから、3階の情報と11階の森口さんとか、清水、森口、特に森口さん。森口さんと僕は同じものを知っていた。森口さんと3階がどうなっていたのかはわかりない。でも、僕が言えば、当然下から森口さんが担当者を上げてきて適宜聞いていたと。そこで逐次様子を聞いていると、警察はもうですか防衛省はこうですということが入ってくるから、これはおかしな。

それで、文部科学省というのは、そういうところの押し方が弱いので、警察とかは、やはりしっかりしているのですよ。それは僕も関係の長い経験でわかっているから、これはなかなか、やはり事務の同士のやりとりではしんどいなどと。警察とか防衛省というのは、決めることはすごくきちんとやってくれるのだけれども、しんどいと思ったということは事実。ここでもう一回モニタリング体制を、これは、しかも長期戦になるから、しっかりしないとだめだなという判断もありました。

○質問者 では、この場に、16日日朝の協議に警察、防衛はどうもいなかったようですねども、そのニュースとしては上から落とすという。

○鈴木前副大臣 上から落とす。そうではないと、やはりすべてはリアルデータが大事であって、リアルデータをとにかくいっぱい集めということが一番大事だと。現に、浜通りの首長とかが、そのリアルデータを見ているいろいろなジャッジをしていましたから、その浜通りの首長に対して、かつ、災害対策法は、要するに地方自治体の首長に避難何とか権限、原発法は別ですよ、原子力災害法は別だけれども、一般の災害については、地方自治
取扱い厳重注意

体の首長が権限を持っているので、要するにその人たちにどれだけの判断材料を与えるかというのが僕のミッションだと思っていましたから、とにかくリアルモノターデータを集める体験を１か所でも多く、１か所でも多くリアルをとって、とにかく首長とか現場の人たちに、首長だけではないけれども、要するに現場関係者に渡すということが大事だということですね。

○質問者 15日に官邸の官房長官秘書官が、防衛省、警察の職員を集めてモニタリングについて打ち合わせをしているということを、先ほどちょっと話題にさせていただきましたけれども、その席上、防衛とか警察との間での実質的な根回しをやっていたという可能性もあるのでしょうか。この16日には、防衛、警察が来た。

○鈴木前副大臣 官房長官秘書官というのは何省から行っている者ですか。

○質問者 出席していた人間としては、警察もあります。

○鈴木前副大臣 要するに、招集している側の出身省庁は、経済産業省ですか。

○質問者 警察、経済産業省。

○鈴木前副大臣 そうだね。その中のだれがやっていたの。

○質問者 これが、まだ全部ヒアリングをやっていないのでわからないのですが、警察かもしれないですね。

○鈴木前副大臣 警察かもしれないし、経済産業省かもしれないね。

○質問者 なるほど、わかりました。

○鈴木前副大臣 多分、私は経済産業省の可能性が高いと思うんだね。わからないけれども、要するに保安院の話だから。原子力災害の方の官房長官のサポートはだれがやっているのだろう。

○質問者 わかりました。

○鈴木前副大臣 あのとき、経済産業省の官房長官秘書官はだれだったか。

○質問者 井上さんです。

○鈴木前副大臣 井上さんね。そうだね。

○質問者 1点だけお聞きしたいのですけれども、4号機が爆発したのが16日の朝9時過ぎだと思うのですけれども、だから、14日には3号機が爆発して、2号機も翌日おかしくなった。そこで、その段階で非常に危ないという認識が、私も、4号機が爆発してから、これは何基も同時にだめになる可能性もあるということ非常に危機意識を感じたのですけれども、それによって、14日から15日にかけての一連の事象の深刻化によってモニタリングに対する取組み方が変わったのか、あるいはここで役割分担とかが公式に論じられ始めたのでは、20キロメートル外でもとんでもないことになるかもしれないという認識があったのではないかということのような推測を私はしているのですけれども、だから16日に、一番短い、早い時間でこれを決めたのだというような気もするのですけれども、その辺はいかがでしょうか。

○鈴木前副大臣 別に4号機に限らず、既にどんどん、要は深刻になっているわけですね。
取扱い厳重注意

というか、少なくとも深刻であると思われる事象が起こっているわけではない。それで、だから、何というのですかね、何かの予断をもって早めたか早めないかという話ではなくて、とにかく、もう可能な限り全力でモニタリング体制を構築するということでその数日前から走っていますから。

ただ、一番最初ととか、都内だったか関東圏内とか、東北道で行くわけです。それで、まず東北道が陥没していると。そうすると、通常であれば3時間や4時間で行くところが、やはりかなりかかるわけですね。まだ行くのかね、なぜだと言うと、いやいや道路が陥没していますと。インターネットをおりてからその現地に行くときに、地図で見ればこんなふうなだけれども、まだ着かないのかと、こちらはある意味でいろいろということを既に我々はわかっているわけです。

当時は通信があれていますから、衛星携帯電話で何時間かに1回つながるわけですね。常時つながるという通信状況ではありません。そして、とにかく向こうも、とにかく極力、極力電話をかけ続けながら我々に教えてくれると。そうすると、モニタリング体制を構築するということが、東京で考えているよりも、やはり現場は相当大変なのだということを既に我々はわかっているわけです。

ただ、細野さんを初めとして、あるいはメディアは、早くしろ、早くしろだけ言うわけで、こちら側は体制を整えなければいけないわけて、どうしたってタイムラグが出るわけですね。現に、輸送手段とか通信手段がそういう状況ですから、あの中できちんとした指示をおろし、かつまた、要するに手持ちの機器と車と人材は全部出しているわけですから、不利、モニタリング体制はもっと強化しないといけないということはあるわけですね。

そうすると、これ、どうやって人繰りと車繰りと、それから機器と、これは別にだれかに使えるわけではないので、いろいろなボトルネックが多すぎるわけで、そのボトルネックをどうやって埋めていくかというところで、しかも、かなり時間がかかっていくというリアリティーを、要するに、現場でそういう体制整備をしていると、当たり前のどこでも、通常の東京と福島間の移動では全くないということが改めてわかるわけですね。

だから、とにかく、そのボトルネックの中でどうやって1台仕立てるのか、2台仕立てるのか、3台仕立てるのか、それも、しかも日本中のモニタリングカーを集めたり、あるいは機器を集めたり、要員を集めたりするというオープン化をしていますから、それで、ああ、やっと1台立てた、次は4台立てた、次は何何何としてたとかというので、とにかくコンペしているという感じでしたね。

だから、何か今の話がアクセレレートするとかしないとかということではないと思います。

〇質問者　わかりました。
〇質問者　すみません、もう一点、役割分担の在り方について、先生の考えられたことにについて御質問させていただきたいのですが、先ほど、一番最初のところに、戦略として、つまり情報を集める参謀と、それについて戦略を立てる参謀というのは別であるべきだ、
【取扱い厳重注意】

これは一般論としてすごくよくわかる話でした。なるほどなという部分です。

具体的に、文部科学省で、そういう中で情報を集めるだけ、モニタリングやったものを集めるという作業だけでなく、物すごく大変だったと思うのですけれども、そういう中で評価をするとなおさら大変だという面が一つはあると思うのですが、私が素人的に考えると、当初、まず、他省庁が集めたものを全部集めて集約して発表するという作業、これだけでも大変なので、その評価のところについては、むしろ別の役所にやってもらおうという発想かなと思っていましたら、先ほどのお話だと、そうではないんで、むしろ集める人間と戦略を立てる人間は別であるべきだという発想というか考え方のもとに分離されたと。そうすると、それは。
○鈴木前副大臣 勿論大変だというのはありますよ。それは。
○質問者 そうですか。
○鈴木前副大臣 まず、だから、全体論としては、情報収集と戦略参謀分けるべきだというのは、この世界の一般常識ですね。そういうのが1つと、要するにインテリジェンス論から言えば、これは当然ですねというのがある。そういうことと、逆に、二兎を追って、我々が主として追わなければならないミッションが貫徹できないということはいかんという判断は勿論ありました。
○質問者 わかりました。
○鈴木前副大臣 それで、何というか、他の与件がわからない中で評価していても、それはいい評価にならないので、それは限られたリソースの使い方としては不適切だと思いま
す。大変ということよりも、要するに、情報をいっぱい持っている人が評価はできるわけだから、情報を持っていない我々がやったところで、そのリソースはとにかくモニタリング能力の向上に上げた方がいい。有限リソースの適正投入という観点からも、それが正しいと思っていきましたということですね。
○質問者 わかりました。そういうことであれば、ちょっと、つまり、この2つを分けるべきだ論というのは、先ほどちょっと、評価する人間が同時に情報を集めていると恣意性が懸るということをおっしゃって、どちらかというと、文部科学省内部の部下を信用してないの的な、余り信用しない方がいいという発想にもあるのかなと。
○鈴木前副大臣 それは、部下を信用しないのではなくて、人間はそういうものだという私の理解です。
○質問者 わかりました。
○鈴木前副大臣 それは、私がそうだとしても、やはり仮説構築と検証というのは、だから、理論的物理と実験物理は分けなければいけないのです。
○質問者 具体的に、例えば、今度、原発委がいいのかという次の問題があって、そこ辺の感覚が我々にはよくわからないところですが、文部科学省にいらっしゃって、いろいろな技術の方とかとも接されていた中において、そういう評価を、彼だったら評価は十分やれるけれども、しかし、彼のところはもういっぱいいっぱいでとてもということ
【取扱い厳重注意】

だったのか、それとも、文部科学省にはそういう評価をやるまでの十分な人材というのがいなくて、他方、原安委にはそういう人が集まっているねとか、そこら辺の現実論というのは、どんなふうに。
○鈴木幹部大臣　これは、だから、人間の問題ではなくて、要するに、情報収集できない権限とチャンネルがあるかということに尽きると思います。

したがって、次の一貫になるかもしれないけれども、SPEEDIのオペレーションチームを原安委、だから、原安委の事務局体制が弱いということは薄々わかっていました。むしろ、16日のときは、原安委というのは立派な先生がいるから、要するに我々なかなかでも、少なくとも文部科学省の先生なり、班員先生初め、その道何十年の、学会がベスト・アンド・プライテストだと思って送り込んだ、しかも常勤の委員の先生方がいるわけで、それは彼人がやるよりも、その先生方がやるのが圧倒的に望ましいと16日の段階では思っていました。

ただ、オペレーションの陣容が足りないということはあったので、では、SPEEDIチームはおらの下にしろと、それは向かうの求めもあったし、こちらも大変かなというのがあったかもしれないとそれを持ったということはありますけれども。

要するに、評価というのは、何か人数の問題よりも、そもそもセンスと知見の問題なので、だから、そのためにベスト・アンド・プライテストを選ぶことになっているし、そういう人を推しているはずだと16日段階では信じていました。ただ、後に、必ずしもそうでないとも、後でもしもし御質問があれば。

忘れているうちに言っておくと、原子力安全委員会の先生方は、確かにサイエンスでいて知見ある方だと思いますが、たとえ、限定された環境及び時間、いずれ有効の情報と有限の時間の中で判断をするというスペシャリストのいわば欠点は大いにございませんね。極めて多くのデータを集めて、それに検証を重ねて、物すごくクオリティーの高い結論を出すということにたためる人であると、それで、政治というのは、不確実な情報のもとで、ある種のリスクを冒して、有限の時間の中で判断をしていくというのが政治だとか政策だということです。

結果論から言えば、これは今振り返っても、3月16日のときはそんなことを思っていませんでしたけれども、やはりそういう能力においては、学者の中にも大変たたけている人がいるのだということのがわかりました。当然、アカデミックコミュニティは、後者のことも考えた上で教育より人選をしているものと思っていましたが、残念ながら、原子力安全委員会の委員、そういうことにおいては普通だったのかなと。それから、抱えた問題が余りにも大きかったのかなということです。

けれども、では、原子力安全委員の先生方と役人が決めるということになると、それは、役人は決められません。そうすると政治の判断ということです。それも、何もわからない政治家が決めるよりも、原子力安全委員会の委員の先生方が判断した方が何十万倍
【取扱い厳重注意】

もいので、あれは、振り返っても別にこのことしかなかったと私は思いますということですね。
それから、もう一つ思ったのは、結局、コミュニケーションのスタイルというのが違うなというのを改めて感じました。つまり、こういうことです。後で安全委員会の委員の先生が知らなかったという話が国会の証言とかで出てきて、私どもにちょっとしたことが何回もあります。つまり、こういうことですね。当然組織内ですから、文部科学省の係長が聞いていて、文部科学省の係長が副大臣に上がっていたかった場合、それは文部科学省の内部の問題ですね。そういうのが社会科学に通用した、あるいは組織で仕事をしてきたことのある人のコミュニケーションのスタイルです。ですから、役人とか組織人というのは、向こうのカウンターパートまで情報を届ければ、一応伝達義務は完了するのです。役人及び組織経験者は、それで仕事をしています。

しかし、アカデミックの方によってもどされる方の一部ですよ、全部とは言いません。一方、特に安全委員会の委員の先生方に、安全委員会事務局には十分に伝わっていて、しかもそれは、僕は割と報・連・相にうるさいので、きちんと伝えたか、伝ええたか、こういう話を使って、組織には伝わっているのだけれども、組織内のコミュニケーションが、いわゆる事務局から委員に上がっている話と上がっていない話があって、それは、組織に伝えているけれども、個人には伝えていませんね。それを知らないということを堂々と平気でおっしゃるというタイプの方々であるということに後にだんだん気がつき始めて、ああ、ここは情報伝達についての文化でしょうか、要するに育ってきた環境の違いということもディスコミュニケーションというかミスコミュニケーションがあったのだなということがすごく感じました。

だから、いわゆる安全委員会、あるいは委員長が機関報に立って仕事をしているのか、要するに個人に対してやっているのかという文化的な違いで、どちらかというと、組織人はみんな機関報に立ってやっているわけですね。役人というのは機関報ですが、別に文部科学省に言っているといって、全部文部科学大臣に言っているわけではないわけですね、そこは組織の中確かに役割分担というものがあって、情報処理と情報伝達がなされていると。これは自分で判断できないと思うと上に上げるとということが役所の中で育ってきた人は、当然のようにできているわけではないけれども、必ずしもそうでないとしか思えない言動が後に見えたということ。

それから、幾つかこういう役割分担はしましたけれども、私は最善を尽くすということでき、原子力安全委員会に対しても、思い出したことはなるべくアドバイスするようにしていきました。ですから、森口審議官などを通じて、原子力安全委員会事務局長とか事務局に対してこのことを伝えるという話は幾つもありました。例えば、マスコミとの関係とか、これはやはりきちんと、我々は1日数回の記者会見というか記者発表というのを始めましたけれども、原子力安全委員会は、対プレスに対するコミュニケーションの立ち上がりが物すごく遅いと。
〇質問者 ３月25日。
〇鈴木副委員長 そうでしょう。だから、これは、保釈に6日から早くやれということを再三再四私は、何回というのはちょっと極端だけれども、事務局に伝えました。やはりそれをやることが世の中に対して、逆に言うと、普通なら、できない場合には、できないのでもう一回仕切りをしてくれとかということを、1回決めたことがうまく回らないときは、その任にある者が新たな体制の整備というものを行えないというのが長の仕事です。組織の長の仕事です。ですから、我々は、できないものはできないと言うし、できるものはできる。できると言われた以上やると。それで足りなければ応援を求める。これが組織のトップの仕事だと私は二十何年間理解をしてやってきましたけれども、残念ながら、原子力安全委員会委員長は、何かできないときに次の手を、助けを求めたり仕切る直をしたりするのは自分のミッションであるということについての御理解が少し足りなかったのかと。あるいは、別に自分是やらなくていいのでも、それを事務局長なり事務局次長なり、あるいは事務局の係長なりに指示をするというの、その組織の長の仕事であるということについての御理解と、その能力と、あるいはその判断力において難しかったのだろうと。

その問題については、我々は、ここも、今のところは少し個人のあれになるのであれば、委員会の委員はという意味で言えば、別に残していただいて構いません。
かつ、更に、その段階で、ここからは、例えば有名な題さえ抜けばいいですけれども、僕らは、やはりこれは回らないということは感じ、3月16日のときは全部信じて、うまく回ると思っていたけれども、回らないというのがだんだんわかってくるわけですね。だって、記者会見だってやらないのだから、それは、とにかくやればいいわけです。何でやらないんだと。あるいは、例えば記者会見で何か発表する仕方までこちら側が教えてあげているのに、それもやらないわけですね。それで、事務局は、いや事務局には伝えています、事務局は、安全委員長には伝えていますと。こういうアドバイスを幾らしても動かない。

そのことから、官房副長官とか私たものの中で、やはり原子力安全委員がワークしないなど、全部委員でお抱えになっていて、必要な判断とコミュニケーションができていないということについて思いましたけれども、しかし、今度は、これは今後の話として言うと、今の原子力事故はということは国会同意人事になっていますから、そうすると、そこに対しても新しい人事をやるということが非常に難しいということがポトルネックになったことは事実で、しかし、そのことから、福山さんを中心にいろいろなことを決めていく、細野さんがサポートしながら決めていくという新しいガバナンスができていたということなのかかなと思います。
〇質問者 若干、この役割分担のときに、非常時だからこういう役割分担は当然あり得るのかはと思っているのですけれども、組織法、原子力安全委員会と原子力委員会の設置法と同じ法律の中に書いてありますけれども、原安委の設置法の部分を読みますと、助言
【敬意を厳重注意】

機関としての位置づけがすごく明確なものですから、こういうルーティンの中で集めてきたものをルーティンの行政の仕事の中で評価するという作業をやって発表するというのは、若干その閣僚委の組織的な位置づけから言いますと、ちょっと異質なものなんだろうなという感じがあったのですけれども、そのあたりは、何か議論されたか考えられたかといいですか。

○鈴木前副大臣 ですから、別に16日の仕切りは仕切りとして、ワークしないなら別に次の日にかえればいいわけで、非常事態なので、そんなことはいいわけですね。それを、できないならかえると言えと言いました、私は。

○質問者  席上、そういうふうに言われたわけですね。

○鈴木前副大臣  そうそう。だから、やるならやれと。それで、例えば、安全委員会が記者会見をやらないのだったら、それは官邸でやる、官房で。まあ、官邸でやったのですけれども、要するに災害本部の方でやるべきいし。

ただ、繰り返しますけれども、要するに記者会見とか世の中に対する情報というのは物すごく難しいのでというか、きちんとやらないわけしないので、それを本当にきちんとやることが大事だと。私は、あの感情された環境の中では、竹野さんがおおむねうまくやられたと思います。だから、そこへのサポートは幾らでもすると。だから、我々は酒井さんを内閣官房に送り込んだし。だから、僕らの持っているリソースで、酒井さんとかSPEEDIの運用チームとか、要するに我々はあらゆるリソースは提供すると。

ただ、要するに全部のことについて知っていて、そして、一番いっぱい知っていて、どこにリスクがあるか、あるいはどういうシナリオになるのか。要するに、文部科学省は、原子力発電所が収束傾向に向かっているのか被害拡大傾向に向かっているのかすらわからないわけではないですね。当然、それはどっちのトレンドにあるかということをかかっている人が、ニュアンスも含めて、私たちも記者会見とかをよくやっていますから、勿論言えること、言えないことがあります。それから、当然、記者からの質問というのは事前にわかりませんから、どんな質問が飛んでくるかわかりません。そうすると、やはり極力というか、最も情報を持っている人、あるいは最も情報に触れている人がやっていくことが、やはり記者対応においては重要なのです。

我々の決定的な弱点というのは、20キロメートル以内のことを何も知らない。それで、この事態の方向性について、要するに、繰り返しになりますけれども、黒潮化するのか良好になるのかすらの見通しとか、あるいはそういうディスカッションの中に参画させていないものが我々にあるということ。

同時に、先ほどの被災体の問題、医薬品の問題という、人が死ぬということ、現に搬送できなくて亡くなった方は増えました。それから、高齢者のあれは従来のアベレージよりも増えています。ですから、残念ながら私たちは、この間の対応でくらさなくてもいい命を、要は、残念ながら、申し訳ないけれども失っているわけですね。そういう極めて重大なことについては、やはりリーフレットの体制で臨むというもののが大事だろうということです。
それは、だから、原災本部とか宮邸にその判断を集約するということは間違っていなっ	たし、そこをそれなりにやれたとは思いますけど、まあ、そういうことですね。
○質問者 ちょっと時間が押していてあれば、最後に１点だけ、16日に会議が開かれ	ることになったという、このタイミングですくれども、これは、ずっと問題意識を持たれ	していて、官房長官の日程が合わなかったとかということなのか、それとも、16日の夜ぐら	いから急に官房長官に仕切ってもらう必要があるという話が出てきてこの日になったのか	というのは、御記憶ございますか。
○鈴木前副大臣 いや、問題意識はずっと持っていました。特に、一国民としての、ある	いは政府の一員としてのですが、やはり20キロメートル以内の話は何もわからないという	ことに対する焦燥感ということはありました。しかし、そこはもう信頼するしかないと。
全貌を把握している原災本部と、それから、それをサポートしている原子力安全委員会、
それから、発電所を見ている保安院、ここを信頼するしかないと。
それでは、もう一つの僕の配慮として、私も、このまでの修羅場はやったことありませ
けれども、それなりのいろいろな修羅場をやってきました。要するに、コミットメントも	しない、何の責任も果たさないやつが、大丈夫か、大丈夫かと外から言うことほど、
責任ある人たちのミッションを完結にするのに妨害的なことはないということ、私は今ま	での二十何年間のいろいろな経験で知っていましたから、我々にそういう思いはありません。
これは、やはり私の第一課題をおかしいけれども、やや馬ではないわけですねけれども、
逆に言うと、それ以外の外野からの影響やあれに対するやや無責任なそういうアプローチが	非常に多いということ、私もいかがなものかと思って見てしまいました。だから、私はそ	の愚を振り返さないように、少なくとも僕が妨害要因になることはやめようと。そこで、
もうセンターラインは決まっているわけですから、どにかく彼らには、要は発電所のとこ	ろの対応に集中してもらうということ。
それでは、その避難命令とかが出ていましたから、20キロメートル圏には、基本的には作	業員とか一部の人を除けばいないわけですから、人命をきちんと守るという観点からは、
とりあえず20キロメートル避難命令以上の措置はいわゆる、そのそれで、勿論も	とを冷やすということに集中してもらうべきだということ。それで、20キロメートルのパットサーを	とって避難してもらっているだけだから、あるいは20キロメートル以上の人たちにリアル	データをフィードバックすることで適切な行動をもらえるということを、とにかくこの	間はきちんとやり切るということが、国民の生命、安全の観点からいいことだと。それで、
少し余裕が出てくれば、それは次第進化させていければいいわけです。そう思っていました。
○質問者 先ほど途中で話を十分お聞きし忘れていたのですが、3月15日に浪江町で非常	に高い線量が出、それにについて、いわゆる専門家の方とお話しされたりして。
○鈴木前副大臣 その前から話をしていましたよ。
○質問者 そうですか。浪江町のときにもということでしょうか。
○鈴木前副大臣 それはわかりません。1対1対応ではわかりません。
【取扱い厳重注意】

○質問者 田坂参与に。
○鈴木副大臣 田坂参与と話をしたのは、だから、さんとは、その後からもう断続的に話をしているから。
○質問者 田坂さんにお電話されたと。
○鈴木副大臣 田坂さんから電話がかかってきたのです。
○質問者 もらって。　
○鈴木副大臣 ええ、もらって。それは1回だけですというか、1だけです。
○質問者 それは、偶然何かそういう数字が出ているときだったということなのでしょうか。
○鈴木副大臣 それは偶然でしょうね。その数字と、あの数字はもう公表されていたのですか。
○質問者 されています。
○鈴木副大臣 だから、あれは、たしか世の中の人はいっぱい見ていたのですね。
○質問者 深夜に数値が出まして、マスコミにはメーリングリストのようなものがございまして、それで送られています。翌朝に記者会見で公表と。
○鈴木副大臣 では、田坂さんは別にそれを見て言ってきたわけではないと思う。
○質問者 そうではないということですね。
○鈴木副大臣 それはね。田坂さんは。
○質問者 330というのは15日の夜に出たデータなのでですけれども、田坂さんと話をしても、福山さんに是非話をしてくださいという田坂さんのアドバイスといいますか。
○鈴木副大臣 これは、田坂さんが言ってきたことは何かというと、要するにコミュニケーションのとり方のアドバイスです。それはおっしゃるとおりで、コミュニケーションをどういうふうにきちんととらなければいけないかということは、そのとおりなので、その話をした。別に何かの対応についてのアドバイスではありませんでした。
○質問者 コミュニケーションというのは。
○鈴木副大臣 要するに、官邸が世の中に対してどういうコミュニケーションをとるかということについて。田坂さんから私にかかってきたのです。田坂さんは、1月に菅総理にくっついてダボスに行っていたので、そのアドバイスをしたということお話でしたので、それはいいお話だから、どうぞ福山さんにつなげましょうという話です。
それとは別に、私たちは、だからさんからはずっといろいろな話を聞いていて、文部科学副大臣室で聞いたこともあるし。だから、政務三役の打ち合わせとかをやっていて、部屋で待っていてもらって、そこでずっといろいろ、割とべたつきでくれた日もあるし、大臣に戻るけれども、何か電話してほしいとか、向こうから電話がかかってきたたり、あるいはメールが来たということで、常時、ずっとホットラインでという。さんについては、ホットラインでという状態がずっと続いていましたね。
○質問者 そうすると、田坂参与の電話をきっかけとして福山副長官と話をされるよう
【取扱い厳重注意】

になり、その中で、モニタリングの話も出てきた、そういう流れになりますか。
○鈴木前副大臣　それは全然違います。田坂さんの話を言ってしまいましたから話がややこしくなってしまったけれども、田坂さんはそのこととは余り関係ない。
○質問者　それとは別に、福山副長官とモニタリングについてずっとやりとりを何度かされていました。
○鈴木前副大臣　そうそう。もう福山さんはちょっとゆる電話しているから。だから、福山さんとは、別にそのときからコミュニケーションが始まえたわけではなくて、福山路とは始終、何十回と前も後も電話とか、あるいは福山さんの補佐官絡みで、つかまらなければその秘書官に伝言しているし。福山さんと、とにかく割とホットラインで、福山さんから僕のところに電話があってくるし、僕がいなければ森口さんに伝言したり、そんな感じですかね。
○質問者　それで、15日の夜ぐらいから、翌日、官房長官に仕切ってもらうという話をされたと。
○鈴木前副大臣　そう。
○質問者　わかりました。
SPEEDIはちょっと簡単にお伺いしたいんです。
○質問者　先生、もう2時半。
○鈴木前副大臣　そうですね。だからこれ、できればSPEEDIまで行きましょう。ちょうど区切りもいいからね。
○質問者　SPEEDIですかすれども、3月15日に、事務方の方は政務三役にSPEEDIの試算結果を上げたと言っておるのでですが、そういった御記憶というのはございませんか。
○鈴木前副大臣　ちょっと日付までは覚えていませんけれども、SPEEDIというもののが存在しているということは認識しました。それから、3月11日とか12日とか、私も断続的に3階に行っていますから、BSCIに。すると、画面でその画面が映っていますね。
○質問者　では、その時点でもう、これは何だとかそういう話をされたと。
○鈴木前副大臣　だから、これはどういうERSSだということは私は知っていた。
○質問者　わかりました。事故以前はSPEEDIというものではありません。
○鈴木前副大臣　事故以前は、そういうものがあるだろうとは思っていなかったけれども、明確に意識していたわけではありません。けれども、行けば、モニタリングの中で、ああ、こういうものがあるのだと。
それぞれと、11日か12日かちょっと忘れたけれども、文部科学大臣が第1次のモニタリング体制を指示しましたとかいうあれが出ているのですね。
○質問者　車の派遣の。
○鈴木前副大臣　そうそう。その発言要領の一番最後にSPEEDIの絵が入っているのですよ。
それは、何か海の方にこう絵が出ているのがたしかくつっていたのですね。
○質問者　済みません、ちょっとその資料をいただいていないものでして、それはどう
いった趣旨の発言要領で、なぜSPEEDIがそこに入っていたか。
○鈴木前副大臣　いや、なぜSPEEDIでしょうか、別にそれは参考資料としてつけていたのです。
○質問者　参考資料として。
○鈴木前副大臣　いや、発言要領というのは、通常大臣がやるとつけてますね。役人ならわかると思うけれども。
○質問者　つけてます。
○鈴木前副大臣　最後に何かその絵とか何かがついていましたよ。
○質問者　では、大臣が何かSPEEDIについて話されるというよりは、事故の現状はこうです。
○鈴木前副大臣　現状はこうですという何か参考資料の中には入っている。高木大臣がそのことを認識していたかどうかは知りません。ただ、僕は、初期の発言要領は大体見ているので、3月中ぐらいは見ています。4月ぐらいになってからは、鈴木さんにきちんと組織論上、仕事を戻して、会議の仕事は鈴木さんがやってくださいましたけれども、最初の1週間とか2週間ぐらいは見えていました。それは、むしろ文部の仕事に4月以降はなるべく戻るようにしたのだけれども、最初のころは見えていましたから、SPEEDIというが、そのシミュレーション図があるということは知っていましたし、それから、モニタリングもSPEEDIのその絵を見ながらやっていましたよ。

要は、なるべく渡いところというか、どこから行くかという、モニタリングの場所選定、どこから測定していくかということの参考にはSPEEDIを使っていました。それは当然だと思います。よりウォーニングをしするということが僕たちの仕事だから、それで放出源データがわからない中で、より世の中に対してえる方法、しかもSPEEDIシナリオについては、結局官邸の仕事なわけですね。僕たちの与えられたモニタリングをやって公表するという権限の中で、国民の皆さん的生命と財産を守る、安全を守るという観点からすれば、その一番高そうなところからはかかっていて、なので高いところが早目にわかるということ。
○質問者　わかりました。これは、文部科学省からちょっと資料として出てきていたもので、3月15日の会合で使われたものですで、ここに手書きで、最悪シナリオといいますか、炉内に存在する放射性物質がすべて出た場合にこういう数値になりますという試算なので、こういったものを見られた御記憶というのは。
○鈴木前副大臣　見たと思いますよ。
○質問者　このときの会合で、どういうやりとりがあったかとか御記憶ございますでしょうか。
○鈴木前副大臣　だから、そういうことを、これは全量が出ればそういうことなんだねということで、何というか、それを見て、そのことを理解するというか、情報として受けとめるということではないですか。
〇質問者 事務の方に聞いたときに、なぜそれも15日にこの資料を持って三役のところで入ったかといいますと、その日に記者会見をやったときにですね。
〇鈴木前副大臣 たしか聞かれたのですね。
〇質問者 そうです。SPEEDIを公表しないんですかと聞かれて、これは文部科学省の渡辺次長のですけれども、検討しますという回答をして、そういう回答をした都合上、三役にも話を入れた方がいいのではないかということですのでこういう資料が出されたようなのです。
それなりの流れを考えますと、そこで、公表した方がいいのではないかとか、公表できないのではないかとか、そういう話があったのかなと思うのですけれども、そういったやりとりをされた御記憶、どれかこういう感想をおっしゃっていたとかですね。
〇鈴木前副大臣 そこは全部覚えていませんけれども、それと言われたのは何時ぐらいですか。
〇質問者 ちょっと時間までは正確に特定は。
〇鈴木前副大臣 ちょっと覚えですけれども、当然それについてきちんと戦の中に言わなければいけないという意識があったと思います。なので16日に、まさにシミュレーションをどうするのですかということはコンファームした。それで、シミュレーションという言葉は、だから僕は何度も使っていたし、安全委員会の人も、シミュレーションは安全委員会ですねといって、うんうんとうなずいていたから、それはわかりているものとただと思ってしまいました。
〇質問者 16日というのは、枝野官房長官。安全委員会から久住さんが来られて、久住さんがうんうんと。
〇鈴木前副大臣 だから、別にそれについて久住さんから何か異論を唱えられたことは全くないですよ。
〇質問者 シミュレーションという、要するにSPEEDIのイメージ。
〇鈴木前副大臣 だから、私はSPEEDIというもののは知っていますね。これは、まさにシミュレーションですね。それで、シミュレーションについては評価に入りますねという点は確認しているので。
〇質問者 そのときに、具体的にSPEEDIという名前を。
〇鈴木前副大臣 SPEEDIと言ったかどうかまでは覚えていません。
〇質問者 こういうことを念頭に。
〇鈴木前副大臣 だから僕は、SPEEDI以外にも当然シミュレーションはあるからね。SPEEDIはシミュレーションの部分集合であって、極端なことを言ったら、WSPEEDIだってシミュレーションだし、それは、SPEEDI以外にもいろいろなシミュレーションがあるわけですよ。だから、そのSPEEDIをも含むシミュレーションというのは評価ですねと。我々は生データをありました。評価シミュレーションはもちろんでやってくださいということは、これは何度も確認しました。SPEEDIと例示したかどうかはわからないけれども。
後で振り返れば、僕は、SPEEDIとかシミュレーションのことについてのイメージがあっ
【取扱い厳重注意】

たけれども、枝野さんが言ったかどうかは、それはわからない。たけれども、安全委員会の委員にはシミュレーションということは何度も言ったので、私としては、当然これを含むあらゆるシミュレーションについては、安全委員会がやるということで了解されたものと理解していました。

だから、そこが結局、後に思うのだからどれも、安全委員会ところ側の言語が違うな、コミュニケーションが違うな。あるいは、そのとき茫然自失としていたのかもしれないけれども、あれは、ああいうパニック時に強くなる人と、そうでない人と、また分かれるからね。役人というのは、基本的にあいうときに、とにかく、これは、基本的に臨床の医師というのは大体強くなるのだね。たけれども、学者には２つ分かれるなというの、つまり返ってみての僕のオブザーバーーションですね。

○質問者 わかりました。

16日に行く前に、渋みません、ちょっと15日の会議の話に戻ってしまうのですけれども、実は、当時出席した事務官のメモが残っておりますので、15日にこの資料を出されて、三役から、一般にはとても公表できないという意見が出たというメモが残っております。そういう意見が出たかもしれないとか。

○鈴木前副大臣 いや、それは僕は覚えていませんけれども、この全量の部分について、鈴木さんののか松さんののかわかりませんけれども、それは感想として出たのかもしれないし出していないのかもしれないし、それはわかりませんというか、覚えていません。

ただ、だれが覚えて、全量の部分でこれが世の中に出たら、それでなくてもタンクローリーは入らない、医薬品のMRの人たちはもう入らないと言っていて、相馬市長なんかは悲鳴が上がっている中で、その範囲がより広がって、仙台からの供給とか東京からの供給が途絶えるということだとかは、それは、あのときのオペレーションに入っていった人であれば、すべての人がそういう感想を抱くことは自然だと思います。

これは、要するに、きちんととした説明をしないでやった場合には社会的な混乱を招くなということは、それは、そういう感想を少なくとも心の中ではみんな持ったでしょう。それで、それを口にしたかどうかというのは覚えていないけれども、それは当然だと思いますよ。だから、よってもって、きちんとこの扱いを、説明をしっかりとしないといけないということでしょう。

○質問者 わかりました。

それで、渋みません、翌３月16日にもう一度この三役を集めた会合がございまして、それは、まさに官房長官の会議の後だと思われまして、これも記録によりますと、副大臣の方から、影響の評価を行わないことになったのであるから、評価がないSPEEDI等の公表は意味がないので、今後、SPEEDI及びWSPEEDIの運用は安全委員会において運用を公表するものであるという意見が出たというふうに。

○鈴木前副大臣 それは16日の朝のことをみんなに伝えた、評価を伝えたと。

○質問者 鈴木先生がですね。
【取扱い厳重注意】

○鈴木前副大臣  僕が伝えたと。それは、16日の会議は僕しか出ていませんから、それの意味を、リエゾンで言ったかもしれないけれども、意味を伝えるのは僕の仕事だと思ったから、要するにシミュレーションを含む評価ということはそういことで、私がしゃべってきました。それで、20キロメートル圏内のことがわからない文部科学省が、改善基調なのか、更に改善基調なのかわからないし、それから、例えば医療体制に対する影響とか、あるいは医療体制の状況とか、タングロリーの状況とかわからないし、あるいは東京での、要するに、3月11日ですら帰宅難民、それから主要幹線道の渋滞、主要駅の混乱ということがあったと。更にそれについてどういう影響を与えていくのかということについてわかって、それをコントロールして、それをディールする人が、やはりきちんと責任を持って一元的にやる必要があるということを解説したと思います。
○質問者 わかりました。

これは、制度的でための観点から言いますと、このSPEEDIを移すという話は構成大きな話でいて、防災基本計画にもSPEEDIは文部科学省がやると書かれていて、政府のマニュアルにもそうナにいて、それを除けば、安全委員会からすれば、紙は何もなく口頭了解のような形で移管されるということはいかがなものか後になって言っているようなものですが。
○鈴木前副大臣 ですから、あの紙は出ていますと。評価というのは安全委員会がやるという先ほどの。
○質問者 評価という言葉に含まれるという理解ですね。
○鈴木前副大臣 評価という言葉に含まれると。それで、後で疑義があったので、事務方を通じて評価の中にはシミュレーションも入るよということを安全委員会に伝えています。だから、そこに疑義があるのだったから、16日、17日、18日にもう一回再セットするということですね。

かつ、もっと言えば、僕らの組織人としての理解は、安全委員会に運用を移管しているということで、それで実態が始まったわけだから、それがわかりながらもう一回戻せばいいのですよ。できないならできないと言えばいいわけで、それで、紙はあるわけです。だから、先ほどの評価の中で紙を配ったわけです。これこれ。常にこういうときは言った、言わないの話になるから、必ず今日のことはリエゾン、紙にしてください、それで三者で確認しましょう。

安全委員会は、紙を見ないわけがあるのだけれど、後に重大な国会報告の食い違いというのもあって、明確な紙が出ているにもかかわらず、その紙が全く違うことを国会の本ちゃんで答弁するから、この人たちはどうなっているのだろうと思いました。

僕らは、少なくとも紙にきちんと基づいて、原典を確認して物を言ったり、物を決める里するだけでも、それで、わからないけれど、それを確認するのはわからない側の責任だという意味を受けてきているので。
○質問者 その評価のところに、「評価・シミュレーション」というような言葉を入れる
【取扱い厳重注意】

ということはなかったですか。
〇鈴木前副大臣 だから、それは後に言えば、疑義があれば、向こうが入っていないということであれば、書きかえたものを入れればいいでしょう。
〇質問者 明安委からは、多分入れてくれと言うわけではないでしょうか。
〇鈴木前副大臣 そうそう。それで、しかもSPEEDIの運用が向こうに移っているわけだから。そうすると、その段階で違うなら違うと言いますねと普通は思いますよ。
〇質問者 そうしますと、向こうの評価には、そこまで入っていないという認識だったということですね。
〇鈴木前副大臣 そう言っているのですか。
〇質問者 そうですね。
〇鈴木前副大臣 いやいや、僕は聞いたことがないから。では、要するに、自分の仕事でもないことを、なぜSPEEDIを管理下に置いてやっているのですかということなんです。
〇質問者 これは、安全委員会としてもSPEEDI、それまでは計算依頼というものは文部科学省経由でしか出せなかったシステムなのでですけれども、それを安全委員会としても、いわば自由に活用できると。移管されたという意識がないというような考え方でいて、評価というもののが、ワーリング自体が非常にあるいはいまだったことで、ここにちょっと。
〇鈴木前副大臣 だから、そこをクラリファイしなかったということと、それは勿論そうなのだけれども、後にはという、同じ日にそういう疑義については、当然疑義が出ると思っていたから、我々は、これについては含まれないという発言要領も渡してあるわけですよ。それで、そういう発言もしているわけですね。それについて文句を言ってくる、要するに、僕らは、最終的に、彼方だから紙ベースで、違うなら違うということをついていきます。

しかし、安全委員会は、後で振り返ればそののだけれども、紙が行っていて、しかも事務局に渡していて、それについて違うなら違うと言えと言っているのに。言わないということは、それで了解されたとみなしますね。そのみなしのまま進んで、逆に言うと、そうしないという緊急対応の仕事はできないし、平時においても、彼方はそういう仕事をしているね。彼方というか組織としての仕事の円滑なのは、もちろんそうということを言っているのなら、やはりできないなということが更に確認できるという発言なのだけれども。それは、僕らは後半に気持ちの力だけもね。だから、より事務局にきちんとと言っておけよということは言ってあって、これは絶対トラブルになったので、私は紙にしろ、それから通知しろと。

だけれども、きちんと原子力安全委員会が、そういう意味で、これは別に個人攻撃ではないけれども、それは、やはり久住先生は大丈夫かなと思いました。だけれども、そこまで大先生が大ちゃんと言っていて、わたったと言っているわけだから。だけれども、後で見れば、久住先生は後にとんでもない国会答弁とかをするから、理解ができることと、こういう組織間の非常にストレスのある中での報道・連絡相手ができないんだということは、後に
【取扱い厳重注意】

気がつけども、

しかも、こういう実態まであって、そこで普通なら気がつきますねと、だから、当然そこでうまくいっていて、かつ、それをめぐっていろいろなやりとりがある中で、文部科学省がこういう所掌を分けましたという発言をしているわけだから、当然、お互いでどこかで。

だから、もっと言うと、SPEEDIを早く出せということは、我々は原子力安全委員会に何度も言いました。かつ、その出し方は、100％で出すのか、10％で出すのか、20％で出すのかという出し方があります。逆の立場になったとき。それは、実に決めるわけではないと。要するに、全量で出す方法もあれば、相当いろいろつけて、だから、例えば、後で見ると13％だったか17％だったか、大体そんなものだ。そうすると、炉心のことはわかっている人たちなのだから、10％の場合、20％の場合、30％の場合くらいで出していきたいわけですね。あっ・仮定を置いて。

そこは、炉心のことはわからないわけだからと彼らは言っているわけで、そうすると、

とにかくまず記者会見をやると。別にこのことだけではなくて、SPEEDIの話ではなくて。

だから、25日まで彼らは毎日のように、今日やられ、今日やられと言い続けてきた。それで、その出し方が彼らはわからないから、出し方と、出すのかも、全量で出すのか、30％で出すのか、20％で出すのか、10％で出すのかというのは、それは、それこそ元の本部なり安全委員会が、まさに総合的な高度な判断をすべきことであって、それは私たちはわからない。

だから安全委員会にやられと言っているのだからということは何度も言いました。だから、今日も記者会見やらないです、今日も記者会見やらないです、ナマのつぶてで来て、もう本当に困ったなど。

だったら、我々はとにかく実測データをいっぱい出せば、判断の材料で、それはシミュレーション値より実測値の方が大事だから、より確度が高いから、それにとにかく我々は専念するしかないんで。それであって、実寄はないわけだから、気持ちにかかわらず、そっちは動かないけれども、我々は実測値をとにかく数を増やしていこうということを指示しました。もともと。

それはなぜかといえば、我々、先生からSPEEDIの存在を早く明らかにしろということを毎日に言っていられたので、なので、言われるたびに原子力安全委員会にそのレコメンデーションをしていました。それで、しばらくたったときに、まあ、そういうことかということになったのは、東大の工学部長はSPEEDI公開に反対だということがある筋から流れてきました。だから、私が思うに、そういう何か所掌論の話ではなくて、そもそもSPEEDI公開に、公開すべきとすべきでないとこれが、東大の理学部は公開すべきだし、東大の工学部はすべきでないという話があったのだ。

私の結論は、少なくとも10％の場合、20％の場合、30％の場合とかで、そういうことを言ってはいないけれども、要するに私の論調としては、幾つかのケース分けをして、そして、この場合はこうだということを早く出したほうがいいのではないかというニュアンス

31
【取扱い厳重注意】

は伝えています。それが組織の中でどうなっているのかもわかりません。しかし、その組織には伝えている。

ただ、やはり根強く東大工学部長もそう言っているというのは僕にも聞こえてきているし、そこは、まさに理学部と工学との間での評価が分かれていたということではないかと、そこは、東大工学部長が出すべきでないと言っていることは、これはかなり確度が高い。そこから、それが原子力安全委員会の中の議論にどう影響したかについては、私はわかりない。

○質問者　わかりました。時間が過ぎてしまいましたので、ここでちょうど。

済みません、もう一回、ではスケジュールを入れていただいて。また、秘書の方に御連絡とさせていただいてということでよろしいですか。

○鈴木前副大臣　はい。